

### 三次の文化と文学の揺籃

— 夏目漱石・龍口了信・佐伯好郎・田山花袋・

中村憲吉・倉田百三・鈴木三重吉など若き群像 —

寺 田 芳 徳

#### (一)

道は昔からさまざまな人々が行き交わしたであろう。同じ道を毎日歩くうちに其の辺の土地や人情になれてくるから妙だ。三次を「みよし」と読める人、三次地方の地理や歴史を少しでも知っている人に出会ったりするとき、こころのときめくものである。広島のこととは広島の人が一番よく知っているかと言うと必ずしもそうでない。まして、広島の方の人や東京の人の中で「三次」を可成り正確に知っている人が少なくても驚くにあたらないであろう。知らぬが仏と言うくらいだから、今日・現在が私たちの生活に理屈ぬきに最も大切なものであることは言うまでもない。しかし現在の道路一条をみて、その位置・形状・名称などに皆ことごとく昔の人々の血と汗の結晶であることを知る。そこに無量の感慨と歴史を秘めて現在に迄もその影響を及ぼしている姿を自覚することが出来るならば、世界はずっと広がる。そして私たちの生命のよろこびは深くなるのではなからうか。例えば今、とぼしい暮しの現実のもとにおいて

もなお、縦横に発達した高速度自動車道の未来図をゆたかに思いめぐらすと同じように、「過去」もまた、「現在」の自己の中に生きた歴史となつてよみがえってくるであろう。それはもはや、小さい自己を超えた世界とおもわれる。

いま筆者の住んで居る五日市町は広島と宮島のほぼ中間に位置する。瀬戸内の青い海に埋立工事が今もなお盛んに行なわれている。島々の緑にブラシをかけたような黄褐色の地肌、白い花崗岩のまじった砂地に思わず目を見はる。人々は明けっ放しで、仕事に能率を喜ぶように見え、楽天的な何となく明るい魅力がある。夏目漱石（なつめそうせき）に言わせれば「もつともこの熱さでは着物はきられまい。日が強いので水がやに光る。見詰めていても眼がくらむ。」（『坊ちゃん』松山着の下り）であろう。他の国の育ちには、静かな緑の陰と清らかな谷川の水がもつと安らかである。例えば広島作家鈴木三重吉（すずきみえきち）と三次の歌人中村憲吉（なかむらけんきち）の遺した仕事を比較してみても、何かに気づかないであろうか。己妻から草津を通つて廿日市に向う途中に、山が海に突き出ている。昔から旅人の難所である。『萬葉集』に佐伯山と出てい

るところ、今は鈴ヶ峯ゴルフ場が中腹にある。この辺で海の方にむいて腰をおろし一服する。宮島の彌山（彌山）が右手に、似島や広島（似島）の町は左手一帯に、正面には江田島（江田島）の海峡まで青い海原。ひろびろとして明るい日射は特有の強烈さがある。暗い嵐の日ほどこなである。日本国中でも一等の景色だろう。そんな気持がする場所だ。うしろの山ぞいに家が群がり木立の中にお寺が見える。井ノ口村の正順寺だと教えてくれる人がいた。後で少しふれるように関心もあり、ちょっと立寄ってみた。少し歩くと川に橋がかかって五日市の町に入る。中村憲吉は三次に近い布野村から一時この町の海老山（海老山）（かいろうやま）に近い浜辺に、転地療養のために来り住まいしていた。その先が旗の浦を経て廿日市町である。

町の入口に桜尾（さくらお）と称する昔の城山があり、近くには旧石州津和野藩の船屋敷（本陣を含む）が置かれ、千石船の出入りで賑っていた。津和野藩は三次藩と同じように小藩であったが明治維新までつづいた。城下町津和野は島根県の西南端にある。そこから中国山地、六日市、錦町・生山（なまやま）峠を越えて広島県佐伯郡の津田（現在の佐伯町）を通り廿日市町にたどりつく道を津和野街道と言ひ古している。江戸時代や明治時代の初め頃は、この宿場町から瀬戸内海を船で大阪にむかい、京都・江戸へと通じ、西は九州、南は四国へ通じたと言ひ。夏目漱石より五十年前上であり、文豪となった森鷗外（もりおうがい）、はては話術家の徳川夢声など津和野町の出身である。多くの人々はこの街道を通って東京に往復したことであろう。特に長崎から捕われの身となり津和野藩へ送られたキリシタンたちはこの道を歩いて迫害と殉教との苦難に堪えたのである。

今も廿日市の年寄の人の中にはそのような津和野に非常に親近感を抱いている。これもよく知ってみれば、このように歴史の絆がある。百年余を溯（さかのぼ）る明治維新（天保の改革一八四一年前後から西南の役一八七七年に至る時期、明治元年は一八六八年）は実に大きな歴史の変革であった。明治五年になると、今日の学校教育の基礎となるべき近代的な教育制度が布かれた。その当時、廿日市に佐伯好郎（さえきよしろう）というお方が生れられ、まだ僅か満一歳であった。長じて大学の先生と成られ、終戦後は郷里の廿日市町長を長年になたり勤められたこともある。九十四歳の高齢で召天されるまで学問（中国基督教史の研究）に打込んでおられた。佐伯先生は異色の画風で知られる太田忠画伯（新制作派会員、筆者も師事）の家を三次に訪ねられたこともある由である。筆者は或る日先生から呼ばれ、いろいろの昔のお話を聞くことが出来た。日本に入ってきた英語は、どのようにして学び取られ発達して来たものか、それを知りたいと思っている筆者には、興味深いお話が多かった。お話の中で時々「オヤッ」と心がときめくことがあった。これから書き下す覚書は先生との対話の一節をもとに、それらのことにもつわり、調べたことや考えたことを織り交ぜたもので、次節（二）の文中に「私」としたのは佐伯先生ご自身のことである。

## (二)

明治十年（一八七七年）は官立の広島英語学校が廃止され、その校舎をゆづり受けて広島県中学校（今の広島国泰寺高校）が開校された年である。二年後には福山中学校（今の福山誠之館高校）が開

校された。明治十三年には三次町に県立広島病院分局が開かれ、また広島刑務所支所、いわゆる監獄が三次に置かれた。

寺小屋式の古い教育から脱して、この廿日市の町に変則中学校が開校したのは明治十二年であった。英語の教師を先ず是非とも連れて来なければ中学の名にふさわしくないと言うわけで、八方探したけれども、それは直ぐのことにならなかった。従って初めは漢文と理科ばかりの授業であった。かくして開校数年の歳月が過ぎていた。「私」はその頃まで英語を二三の先生から習ったが全く幼稚なものであった。ちなみに明治十七年と言えば県北の庄原村(後に庄原町、庄原市と発展した)に英学校が開立された年である。明治十年代には宇品港の建設が始まり、一方大津波で広島から宮島方面は大災害に見舞われた。

この年、前述の明治十二年、廿日市変則中学校開校の年、山県郡の人で越智某と言う青年がやって来た。彼は福沢諭吉先生の慶応義塾に学んで有名なビネオの英文典 (Pineo's English Grammar) 原書二冊を持って帰郷したところであった。彼は慶応を都合で中退し、廿日市で医者をしていた父のもとに帰って変則中学校の高級に編入したが、すでにユニオンリーダー (Union Readers) 二・三巻を習っていたので廿日市では英語をまだよく読みこなせない教師より学力はずばぬけていた。英語を読むことは驚喜であり、生徒の英学熟通いの熱心は大へんなものであった。当時は、英語の二大系統は東京大学と慶応義塾であった。越智先生は一年半くらい居てまた上京され、こんどは大隈重信の創設した早稲田(当時は東京専門学校と称した)に入られた。その明治十八年八月に明治天皇は山口県徳山から広島へ巡幸の途中、廿日市に御寄りになった。

この頃東京神田一ツ橋の東京大学予備門に龍口了信(たつぐちりょうしん)と言う学生が居た。龍口さんは井ノ口村正順寺の息子さんで、なかなか豪傑風のところがあった。「私」より五ヶ年上で前の年に広島県中学校を卒業して上京したのである。「私」も明治二十年、十六歳の時に越智先生の行かれた早稲田に入って英語を勉強する積りで上京した。大隈重信先生は前歯の出た方で、そのせいか「デモクラシー」(Democracy)と発音するところを特に「デモンクラシー」(Democracy)と大きな声で講演されるのがとてもおかしかった。

「私」の下宿したのは東京神田猿樂町二番地の二で、その一丁離れた所に龍口了信さんが下宿していた。彼はすでに第一高等中学校(今の東京大学教養部)に進学していた。彼の井ノ口村と私の廿日市とは近い同郷であるから非常に親しい交わりをした。その下宿は末富屋と言った。上京して間もない或る日、「私」がその下宿に龍口さんを訪ねようと思つて玄関を上がると、学生達が元気のいい声で盛んに大話している。龍口さんが「ちかごろビーフが切れたのでどうもビビッドでないナー」とやった。すると一座の中から「そうダー、ビーフが足りん」「何事か為さんと欲すれば、吾人はビビッドでなくてはならん」などとガヤガヤ威勢のよい話つぷり。さすがに東京だなあと同時に自信を失つてしまった。その理由は簡単である。ビーフが牛肉であることは直ぐ分つたがビビッドと言う英語はさっぱり分らないのである。Beatは、よく覚えていたがビビッド(vivid)は初めて聞いた単語であった。あとで帰って辞書で調べてみるとvividは元気を表わし、生命力に溢れていることだと分つたが、とにかく、これはしつかり勉強しなければダメ

だぞと自分を叱った。越智先生が廿日市を去られたあと、「私」は殆ど独学で英語の勉強をやって、かなりの自信を持っていた。しかし、未富屋の一事があつてからは自信をとりもどすように、一大奮起して英語を勉強し、それが後になって大へんに役立った。

龍口さんはその座敷に居た十人ばかりの学生達に「私」を紹介してくれた。その中には夏目金之助(後の漱石)や龍口さんと同郷佐伯郡五日市村出身の中村是公(なかもらげこう)(後に満州鉄道總裁となる)という学生さんがいた。夏目さんは自宅が東京市内にありながら、青年学生特有の抵抗感から、家を脱けて無二の親友の中村是公さんや龍口了信さんら同級生十人と一緒に未富屋に下宿生活をしていたところであった。龍口さんは東京帝国大学(現在の東京大学)に入るのに一年浪人されたが、夏目金之助や中村是公は順調に進学して明治二十六年に東大(文科大学と称した)卒業した。その翌年龍口さんは一年おくれて卒業した。英語の出来た人であったが大学では日本史を専攻された。夏目さんの方は英文科を専攻したのである。

### (三)

それより先、明治七年(一八七四年)文部省は東京・大阪・名古屋・長崎・広島・仙台・新潟に国立の外国語学校(のち英語学校と称す)を開いて時代最新の高等教育を試みていた。広島英語学校はその頃、大和田建樹(おおわたたけき)と言う四国の愛媛県宇和島から来た学生がいた。彼は明治十年二十二歳のとき上京して苦学し八年後に東京高等師範と女高師(今の教育大とお茶の水女子大)

の先生となり明治二十四年までいた。岩波文庫の『日本鉄道唱歌集』は楽しい本だ。なつかしい歌が年代順に沢山のついている。その中に彼の翻訳したり作詞したのが見える。例えばスコットランド(Sotland)の民謡から取った「夕空はれてあきかぜふき」。これは「故郷の空」と題され、また「汽笛一声新橋をはや我が汽車は」と言う彼自身の作詞した歌、これは「鉄道唱歌」と題された。

前の方は明治二十一年に、後の方は明治三十三年に発表され、日本国中に歌われた。その大和田建樹の勤めていた東京高等師範学校の英語教師に就任したのが大学出たての夏目金之助であった。明治二十六年十月のことである。当時、今言う東京大学文学部長の役にあつた外山正一(とやまささかず)の推せんに依るものであつた。それから半年して夏目金之助は東京高師の勤めが嫌になり、また体の調子が悪く、親友の俳人正岡子規(まさおかしき)の郷里である四国の松山中学に赴任した。一年して松山も辞めて熊本第五高等学校(今の熊本大学)に転任した。明治二十九年四月の事である。

この頃、広島県議会で広島県北部中学校建設の議案が盛んに討議されていた。すでに三、四年前の明治二十五年に庄原英学校は廃校の止むなきに至って、その施設が有ったから、庄原設置派と新しく三次設置を支持する議員たちの派に分れて、世論は沸とうしていた時である。けつきよく県北の中心地としての歴史を考慮して、三次町から三キロ東に離れた八次村に新しい中学校が建てられることになり明治三十一年(一八九八年)四月広島県立第三尋常中学校の開校を見るに至った。三次から十六キロ東南になる吉舎(きさ)の町には、日影館中学校(明治二十七年設立)と言う私立学校があつて、ライバルらしい斗志を燃やしていた。創設者は慶応義塾出身

で青年教育家の奥愛次郎、それを支えたのは同学の宮沢順定と言う教育者であった。この当時日本は隣国の清国(しんこく)に戦勝して国民の意気が大に上がり、教育、文化への関心が高まっていた。経済力は急速に強大となり近代国家としての国民的自覚が増していた。その頃、文部省に久保田譲(くぼたゆづる)と言う人がいた。

豊岡の出身で慶応義塾を卒業し文部省に入り、明治七年広島に国立の師範学校が創設されるとき初代校長をつとめ、文部省に帰って明治三十年前後の頃は会計局長、普通学務局長、文部次官などを勤めて、明治三十四年第一次桂内閣の文部大臣になった。日露戦争の開戦論すなわち主戦論を唱えた人である。それはともかく、久保田氏が広島県の教育事情に詳しくあったことは推察に難くない。

かくして東京大学で日本史を修めた龍口了信さんが選ばれて、当時に勤中の広島県立第一尋常中学校より広島県北部の三次に赴任して来られることとなった。創設準備をかねて初代学校長に任命されたのは明治三十年十月のことであった。大勢の先生方と共に龍口先生は広島県立第三尋常中学校創立の大切な仕事を為されたわけである。その御在職は僅かに一年有半に過ぎない間であったけれども、初代学校長としてその名を忘れることは出来ない。非常にスケールのある人物で荒法師のような豪快な性格であったから、多くの逸話(例えば便所に行かれて落し紙を忘れたので十円札でお尻を拭いた……用務員さんがそれを汲んで拾い、おしただいて……云々など)を残して再び上京されたと言う。東京に行かれたのは本願寺系の高輪<sup>たかぎ</sup>中学校の校主兼校長に就任するためであったと言う以外はよく分っていない。その後その学校を経営しながら衆議院議員を二期当選、一期落選と言う特異な実話は、まさに龍口先生の面目を物

語っているように思われる。井ノ口村の御生家である正順寺を訪ねてみれば、その辺りの環境が、今もなお、ありし日の一端を語っているように思われる。

ところで、東京と神戸間の東海道線は英国の鉄道を範にして明治十二年(一八七九年)に全通したものである。山陽線が福山まで開通したのは明治二十四年、さらに広島まで開通したのは日清戦争の始まった明治二十七年(一八九四年)のことであった。下関まで全通したのは明治三十四年である。広島県第三尋常中学校が開校するに当って、明治三十一年春はるばると赴任して来られた先生の多くは終着駅広島から、財布をふんばつて山坂を人力車にゆられながら三次の町に入られたものと思われる。ちなみに、杉村楚人冠は可部の奥の上根峠の下で歎息して東京に引返したとの話が伝わっている。何故ならば文化の高揚には、先づ交通の便利をはからねばならないことが自覚される必要に迫られたわけである。いまの芸備線が民間の資本を結集して芸備鉄道株式会社を設立し、起工式を挙げたのは大正二年(一九一三年)二月十二日下深川停車場(駅)予定地である。そして現在の西三次駅まで、六十七キロの鉄道が開通したのは二年後の大正四年(一九一五年)五月三十一日であった。今から二世紀も溯って始まる英国産業革命の波は遂に西三次駅まで達したと言えよう。そして庄原駅が営業をはじめたのは大正十二年(一九二三年)十二月八日であり、岡山県の神代、新見にまで全線開通したのは昭和十年(一九三五年)十二月のことである。

芸備線を利用する人は、あれから半世紀を超える歳月に思いを馳せて、人々が歩いたり川舟に乗り継いだり、或は人力車に乗って旅をしていたことを思い出しているであろう。何時しか列車は走り

風を切る。緑の山かげに、田野に、川の辺に、その一条の連なる有り様を車窓に眺めることが出来る。あの山坂、急峻のあるけわしい、一方のどかな長い白い道を龍口先生達はどんな感慨をこめて往復したことであろう。県北の地に豊かな近代的文化の土壌を育むためには、実に容易ならぬ学校創設の苦勞があったことであろう。

(四)

大学予備校時代すなわち十九歳から二十歳の青春を東京猿楽町の未富屋で過した夏目金之助は、その後鉄道唱歌の世に出た同じ年、明治三十三年九月横浜を出航してロンドンに向った。三年の留学の後日本に帰って来た。その間の熊本の学校における夏目金之助の後任は「私」であった。明治三十一年に彼は東京大学の先生となつて英文学を講じ、かたわら創作の筆をとり、明治三十八年、三十九年にわたつて『吾輩は猫である』を公刊し、同年『坊ちゃん』『草枕』を発表した。長年教職について悩んでいた彼は明治四十年(一九〇七年)には東大を辞めて、朝日新聞に入り、文人夏目漱石として生涯の活動期に入った。一方、親友の中村是公さんはその当時満州鉄道総裁になっていた。

青春時代に同じ釜の飯を喰い、学問を語り大いに遊び過した龍口、夏目、中村の三氏の風格には何か時代の明らかな影響と近代的な自我意識と独特の強烈な陰影の中に、金は天下のまわりもの、真理を求めて名声を求めず、天命を知つて悠揚として迫らない『こころ』が感じられる。

明治の小説家・田山花袋(たやまかたい)が福山から上下、三次

の地を経て松江に遊んだのは明治三十九年十月のことであった。彼の紀行文『備後の山中』(『田山花袋全集』第十六卷、文泉堂書店、昭四十九年刊参照)は三次町一泊の思い出をよく物語つている。

また『蒲団』のモデル(岡田美知代氏、上下町出身、今は庄原市在住)に惹かれて来た彼の旅行体験はその作品にとけ込んでいると見られる。それより先ラフカディオ・ハーン(小泉八雲)もまた明治二十四年(一八九一年)十一月五日松江から三次を経て広島・呉に出て海路を西に九州は熊本に向つた。漱石は自ら三次を訪ねて来たわけでもなく、作品に三次を直接に取入れていると言うのではない。然し龍口了信初代校長の人格を通して、大きな時代と人の気風は、

三次に、少くとも三次の中学校生徒に漱石の片影をも伝えたものと言ふべきであろう。また一方、龍口先生の人柄や思想は漱石に何等かの影響を及ぼしたものと想像できる。龍口先生と夏目漱石の関係はこのように暗示に富んでいると思うのは筆者の空想にすぎない話であらうか。龍口先生の教育的感化は、きっとその在任中とその後の三次中学校にさまざまな影響を及ぼしているであらう。三次の文明開花はこの地方に中学校創設以来急速に高まっていたと見ることが出来る。漱石と同窓で相知る友人龍口先生を三次の地に迎えたことは大なる意味を私達に投げかけるものであると思う。近代教育の展開或はまた三次の英学、言いかえれば英語教育はこの明治三十年(一八九七)前後の頃をもつて一挙に開花し始めるわけである。

なお筆者の混えた主観を和らげる意味で『漱石全集』第十八巻書簡集(岩波書店、昭和四年刊)の二八六頁を繕いてみる。ここには明治三十九年二月十一日に東京千駄木町の自宅から漱石が書き送つた手紙が載つていて、宛名は広島市猿楽町鈴木三重吉様となつてい

る。「昨夜君の手紙がつかまりました。加計君が結婚したのは御目出度い(中略)広島という所はどんな所か行って見たい。広島のものには僕の朋友が少々ある。昔は大分つき合ったものだ。『猫』のうちにある甘木先生も広島の人だ(後略)」。僕の朋友が広島出身で彼等と昔は大いに遊んだりしたものだとなつかしむ漱石の心に、東京神田猿樂町の下宿未富屋で一日おきくくらいによく牛肉を喰ってビビッドな英学生ぶりをお互に發揮し合った中村是公、龍口了信君達の面影が去来したことであろう。彼の朋友は猫や坊ちゃんその他漱石の作品の中にどんな姿をとっているであろうか。『坊ちゃん』の中の中学校長などは龍口さんに似通っていないだろうか。むしろ友人関係は人間漱石を知る一石となると思うのは筆者の淡い思い過しではあるまい。右の書簡文の中で「加計君」とあるのは東京大学で漱石が英文学を教えて親愛の情を抱いていた学生である。申すまでもなく先年、県立三次高等学校で数学の先生をしておられた加計研次郎先生の御尊父加計正文氏のことである。鈴木三重吉は、広島島の奥の三段峡に近い加計町の素封家加計正文氏の家に寄寓して小説『山びこ』を執筆したのでまた名高い。この手紙より先、明治二十八年十月十八日漱石は松山から書簡を認めて、岡山県津山尋常中学校校長菊池謙二郎氏に送っている。その文中において、漱石は山口高等学校(現在の山口大学)から再三にわたって来任の招きを受けている旨を記しているのは注意を惹く。津山は岡山市の北部にあり三次と同じ盆地の古い城下町でこの手紙の頃、中学は新設間もないときであった。三次地方における教育の近代化や英語教育の様子については筆者も執筆に加わえられた『巴峽六十年』(昭和三十五年三次高等学校六十年史刊行委員会発行)が物語ってくれるであろう。

県北の近代化と近代文学の曙を考察するには、特に「庄原英学校」(明治十八年開校・同二十五年閉校)の事蹟が重要である。

## (五)

標題の文字に驚かれた人はこの粗い文を読まれて或は期待はずれであったかも知れない。筆者はむしろ「龍口了信と夏目漱石」くらいにしておいた方が普通でよかつたであろう。然しこのような標題に決めた心の中を省察してみれば、別にいま不自然であるとも思わない。その理由は直ぐに説明し得るものではない。あるものを求めつづけようとするときはじめて心の目に映ってくることである。誰もが経験することだ。筆者が「オヤアッ」と思ったことが、そもそもの始まりであった。かと言ふとそんなに一時の偶然ではない。先だつてのこと、当地の俳人で『廻廊』と言ふ俳句雑誌を主宰しておられる杉山赤富士先生(廿日市高校美術科の先生)に正順寺の御方のお話を聞いてみると、新しい興味が湧いてくる。杉山先生が廿日市から少年の頃、上京して入られたのが龍口了信先生の高輪(たかぬま)中学であった。校長さんである龍口先生は衆議院にも打って出られたほどの豪胆な人で、授業なども早朝から始まり、正午すぎには全部終つてしまふと言うような独創的な型破りのものであった。だから生徒は午後は市街に出て音楽とか美術等の個人レッスンにつくことが出来るので勉強にまた遊学に自由自在に余暇を活用していたと言う。また午後からは商業学校を開いて利便をはかられた。其の頃(大正十一年)、同校に講師として来て居られた大井静雄先生(三次中学校・一高・東大出身)は若々しい教師ぶりで、実にユーモラスな親

切な講義であった。法政経済を教えて居られた。杉山先生はここから東京美術専門学校（後の東京芸術大学）に入られた。

大井静雄先生の兄は大井義雄と言ひ、三次中学校第一回入学生の中で成績人物最優秀の人で、この人を中心に中学校生徒会の活動の母胎が立派に出来たと言われている。弟の大井静雄は、三次中学へは第二回生として入学、俳句、短歌をはじめ文芸に広く非凡な才を発揮した。一年下級の中村憲吉、そのまた下級生の倉田百三、船越象眼の諸氏らと共に「白帆会」（しらはかい）を結成し、三次中学校文芸誌『白帆』を発刊した。これを土台に憲吉、百三らの元氣あふるる中学生たちが文才を磨き、日本の短歌、文学の世界にすぐれた足跡をのこす始めとなったのである。大井静雄のほか福永鉄之助（広島銀行顧問）、宮田峯一（小学館顧問）、和田隆二郎（酒醸造業）等の各氏は皆龍口先生の薫陶を受けられた草創期の力と希望に充ちた人々であった。大井先生はのちに弁護士として東京で活躍し、終戦後は家庭の都合で郷里三次市に帰って母校にあたる三次高等学校に講師（憲法）として教鞭をとった。初代同窓会長にも就任した。短歌誌『くれない』（三次市・くれない社刊）の育成に尽くし、金井時子、清原正人、山広実美、佐々木晃氏等ともに今日の隆盛の基を築かれたのである。

龍口了信先生の赴任された広島県立第三尋常中学校はその後広島県第三中学校、広島県立三次中学校と校名を改めて、発展を遂げて行った。そのような中で、東京に赴かれた龍口先生は三次中学校出身者には好意を抱いて、よくお世話をされたと言う。また龍口先生の遺志は現在の東京渋谷高等学校（私立、全日制・定時制）として御子孫に受け継がれているのである。

それより先、四国の松山中学校から熊本の第五高等学校英語講師として転任する漱石は、松山の俳人高浜虚子（たかはまきよし）と一緒に、安芸の宮島に海路来遊し、春らんまんの紅葉谷公園や朱塗の社殿を回遊し「もみじ」に泊った。この「もみじ」と言うのは古い旅館「岩惣（いわそう）」のことである。この話は杉山先生が『虚子全集』の年譜論争（「もみじ」とは何所か）に終止符を打たれ、今は文学通の中にかくれた定説である。親友となった漱石を虚子はわざわざ宮島まで見送って来て、しばしの別離を惜しんだものであった。それは明治二十九年四月のことである。この時漱石は三十歳、虚子は二十三歳であった。それから一年、明治三十年（一八九七年）、漱石が熊本五高で英語を教えている頃、前述のように龍口先生は広島県立第一中学校教諭から抜擢されて三次中学校創立の仕事に打込んでいた。まだ三十一歳の若さであった。参考までにその頃の日本国中の中学校数（女子校は除く）をみると、日清戦争のはじまる二十七年に八十二校あり、戦勝した翌年明治二十九年には百二十校と急増し、明治三十一年には一六八校、そして日露戦争に勝利した翌年の明治三十九年には二七九校に達していた。龍口先生も漱石も共に慶応三年（一八六七年）の生れである。それから教えると百年余の光陰もひと時の夢のようである。その翌年は明治元年であるから、二人とも日本の近代化と共に成長し、この世の苦楽と時代の急流を見つめつづけたわけである。国民は大きな希望に燃えたつ一方で、知識人には近代思想の自覚にとまらぬ深い苦悩が生れていた。



宮島で虚子と別れて九年目、漱石は虚子の主宰する『ホトトギス』（正岡子規から受け継いだ俳句誌）に「吾が輩は猫である」第一回を寄稿し、掲載された。明治三十八年（一九〇五年）一月のことである。この年の四月広島県庄原町より倉田百三（くらたひやくぞう）が三次中学校に入学した。中村憲吉（なかむらけんきち）は百三より三学年上級生であった。それから五年して明治四十三年（一九一〇年）六月に東京代々木練兵場では滞空四分高度七〇米という日本最初の飛行記録が打ち樹てられたのである。百三は三次中学校を卒業して東京第一高等学校（現在の東大教養学部）に入学したのはこの年の九月であった。この頃から時代のうねりはますます高まり変容を遂げて行く。前述した民間の力による芸備鉄道株式会社（資本金二百六十万円、昭和十二年国鉄に買取芸備線となる）のごときも創立総会を広島市内で開いたのは明治四十五年（一九一二年）のことであった。往き交う道は網の目の如く連なり、人々は座標の如く結びあい星雲の微光を放つ。

時代と人の織りなす機縁によって、漱石は松山から熊本に赴任する途中宮島に清遊したことがあると言われる。そのことについては実話・証言としてすでにふれた。彼はそれから遠くイギリスに留学することになったが、帰国後はついに熊本に帰任することなく生れ故郷の東京の母校、東京帝国大学に迎えられた。かくして遂に夏目金之助即ち文人となる漱石は、一度も三次に来遊の機会こそなかったけれども、同じ大学時代の同級で、しかも同じ下宿の生活を共に

した漱石の学友でありし龍口了信校長その人を三次に迎えたのである。

この地の中学校や女学校に通って勉強に励んだ私達の父母や先輩の人達はこの地を「巴峽」と呼びならし、「みよしの」とほめたたえた。倉田百三の『光り合ういのち』（昭和十五年十二月刊）にもそう言う呼び方が見られる。また中村憲吉は『歌集輕雷集以後』（昭和九年十月刊）に「三次桜景三趣」（十首、昭和六年作）を掲載し、魂の揺籃の地をほめ讃え、深い思慕の情を詠っている。

清水文雄先生の故里は三次盆地を流れて日本海に注ぐ江ノ川の支流の一つ、美しい西城川の奥地の川瀬の音も高き西城町とお聞きしている。源流の美しい比婆山の山麓にあたる由緒ある地である。三つの川（西城川、馬洗川、可愛川）が三巴をなして集る三次の地に、一つの大河をなして流れ行く大渦（おおず）の底知れぬ淵は神秘の光と緑青の紋様をたたえ、今も静かに、また時にその流れは、はやくとどまるところがない。鎮まれる憲吉の歌をここに書き写し稚拙なる稿文の筆を擱えたい。

この山の 櫻にむかいて 流れ来る

河ひろくして 水のひかれる

山のうらは 桜にかはる 松ばやし

目したにふかき 青淵のいろ

（本稿は筆者が教員初任の地、郷里三次の文学風土を追懐して記した旧稿「夏目漱石と三次文化」と（巴流）第八号、一九六二年）に補筆、加正して成稿したものである。